

沈黙に向き合う

沖繩戦開き取り47年

〈42〉

石原 昌家

第3次家永教科書訴訟の「沖繩戦に関する部分」について、原告家永氏側の4証人調べのために沖繩出張法廷(1988年2月9、10日)が開かれた(本連載4月25日、4月26日、5月30日、5月31日掲載)。引き続き、同年4月5日、5月13日、東京地裁で被告国側の証人調べも行われた。国側の証人は、作家の曾野綾子(本名・三浦知寿子)氏と元防衛庁戦史教官の「富野氏」だった。

曾野綾子氏については、この連載を開始してまもなく3回目です。にふれている。氏は多くの沖繩戦体験者にインタビューしてきたようだ。「説得力」のあるその取材力で、読者の沖繩戦体験の認識に影響を及ぼし続けている。国側は原告家永氏側の沖繩戦体験者の証言を論破する切り札として、曾野綾子氏を起用したようだ。その証言をみる前に、富野氏の沖繩戦体験への向き合い方をみていく

安仁屋政昭編 裁かれた沖繩戦

安仁屋政昭編「裁かれた沖繩戦」(晩聲社)

と、なぜ、国側が氏を適任者と考えたかという理由が推測できる。

曾野氏の取材動機

この連載で曾野綾子氏に触れることになった経緯は連載の第2〜4回目(2017年9月8日、10月11日、

曾野氏起用の理由

その内容は、米軍の命令をうけ、投降勧告にきた伊江島青年男女6名を赤松隊がスパイ容疑で斬殺した。だが赤松氏は「当時の状況ではやむを得なかったのだ」と住民にたいしてうしろめたい気持ちにほつともないうち、「集団自決」は「私が命令したのではない」と言い、さらに「真相はほかにある」「もし、本当のことを言ったら大変なことになる」という、謎めいたことを残していることなどである。

虐殺証言を中略

国証人、引用を取捨選択

「琉球新報」紙声欄に投稿した。曾野綾子氏はこの「赤松氏米島事件」に関心を寄せ、取材を重ねて『ある神話の背景―沖繩・渡嘉敷島の集団自決』を1973年に発行した。それを連日、沖繩地元2紙が大々的に報道した。

その内容は、米軍の命令をうけ、投降勧告にきた伊江島青年男女6名を赤松隊がスパイ容疑で斬殺した。だが赤松氏は「当時の状況ではやむを得なかったのだ」と住民にたいしてうしろめたい気持ちにほつともないうち、「集団自決」は「私が命令したのではない」と言い、さらに「真相はほかにある」「もし、本当のことを言ったら大変なことになる」という、謎めいたことを残していることなどである。

「琉球新報」紙声欄に投稿した。曾野綾子氏はこの「赤松氏米島事件」に関心を寄せ、取材を重ねて『ある神話の背景―沖繩・渡嘉敷島の集団自決』を1973年に発行した。それを連日、沖繩地元2紙が大々的に報道した。

「琉球新報」紙声欄に投稿した。曾野綾子氏はこの「赤松氏米島事件」に関心を寄せ、取材を重ねて『ある神話の背景―沖繩・渡嘉敷島の集団自決』を1973年に発行した。それを連日、沖繩地元2紙が大々的に報道した。

「琉球新報」紙声欄に投稿した。曾野綾子氏はこの「赤松氏米島事件」に関心を寄せ、取材を重ねて『ある神話の背景―沖繩・渡嘉敷島の集団自決』を1973年に発行した。それを連日、沖繩地元2紙が大々的に報道した。

た。その事実を知った沖繩の民主団体や渡嘉敷島郷友会の青年部が赤松氏の慰霊祭参列を事実阻止するとう「赤松氏米島事件」が発刊されたこと述べてきた。その取材の動機について、「赤松さんがあんなに悪い人間に書かれており、何が悪かったのだらうか」と知りたくなり、急ぎ沖繩大図書館の地下書庫にかけこみ、当日の新聞をめぐって

「琉球新報」紙声欄に投稿した。曾野綾子氏はこの「赤松氏米島事件」に関心を寄せ、取材を重ねて『ある神話の背景―沖繩・渡嘉敷島の集団自決』を1973年に発行した。それを連日、沖繩地元2紙が大々的に報道した。

「琉球新報」紙声欄に投稿した。曾野綾子氏はこの「赤松氏米島事件」に関心を寄せ、取材を重ねて『ある神話の背景―沖繩・渡嘉敷島の集団自決』を1973年に発行した。それを連日、沖繩地元2紙が大々的に報道した。

(次回は27日掲載)